

性欲と権力の中心への想像

——李昂『自傳の小説』における寓話——

謝 惠 貞

はじめに

中国語の原文で『自傳の小説』という題名は「自伝」と「小説」という二語の間に日本語の「の」を挿入しており、同作が多声法の実験作であることを示唆しているといえよう。訳者藤井省三氏の解説によれば、本作は「謝雪紅という二十世紀を生きた実在の女性の『自伝』であり、語り手による謝雪紅の伝記」と位置付けられる。

しかし、すでに他界した謝雪紅がいかにして自分の伝記を書けるのだろうか。上野千鶴子氏は「謝雪紅の『鬼』は、李昂に取り憑き」、李昂が「虚構を含む自伝を新たに語り直す」と述べている。⁽¹⁾ここでいう「鬼」とは中国語からの引用であり、「幽霊」という日本語に記せる。李昂自身も本作の序のタイトルで「誰の自伝か、誰の小説か」という設問を自ら提出している。藤井氏は、さらに謝雪紅と同世代の伯父を持つ「私」は、ほぼ謝雪紅の物語の語り手である「私」と重なる一方、「語り手の『私』は作者自身にも重なっている。⁽²⁾すなわち、『自伝の小説』という作品は『私』の自伝にして謝雪紅をめぐる小説でもある」と述べている。本作は謝雪紅の自伝にもなり得、李昂の小説にもなり得、李昂の自伝にも成る可能性さえ考えられるのである。

それにしても、李昂はどのように本作を彼女の自伝としたのか。赤松美和子氏は、『自傳の小説』がシスターフッドに依拠した「女に同一化する女」というフェミニズムの主題を担っていると指摘している⁽³⁾。即ち、李昂は謝雪紅に同一化することによって、本作を自らの自伝にも為すことができるわけである。赤松の分析は説得力に富むが、しかし、『謝雪紅評伝——落土不凋的雨夜花』⁽⁴⁾で「革命家」の側面を重視する陳芳明氏と違って、歴史上に名を残した「雪紅」という名前の使用を、「女性」である部分を強調するためだとする赤松の説には、不満を覚える。そこで私は、本作ではいかなる戦略によりこの同一化が実践されたのかを考えてみたいのである。

これまで先行研究や評論などでは、本作の戦略として、多層的な語りがされている。たとえば、文体が一人称と三人称、「私」と「私たち」との間で繰り返されるという点や、儒教礼教イデオロギーに基づく三伯父の民間史観、謝雪紅の個人史が語られる際に頻りに挿入される妖怪や中国史上の女傑たちなどが指摘されてきた。ところが多くの論者は、それらの「逸話」⁽⁵⁾「寓話」に現れる女性の人間・妖怪たちが、本作の副次的物語を形成している点を看過してしまっている。本稿では、この「寓話」が謝雪紅と李昂、そして女性全体の間にもたらす同一化効果と、これらの寓話の連続性、謝の伝記描写との間テクスト性 (intertextuality)⁽⁵⁾、ひいてはその「寓話」の自己完結性 (一本の伏線を成すこと) について論じたい。

邱彦彬氏は、李昂が小説の手法で謝雪紅の自伝を書くのは「歴史の真実が『正史』の論述以外に存在し、史実に背くことは歴史を歪めることではなく、むしろ真相探求の第一歩である」(邱一九九頁) からだ、と説明している⁽⁶⁾。

また、謝の口述伝記は自主的記憶 (voluntary memory)⁽⁷⁾ によるものであるため、李昂自身は、ジェンダー問題の描写をかなり抑えていると邱は主張する。それゆえ、李昂が意図したものは「非自主的記憶を用いて彼女(謝雪紅)の抑圧された女性の心性をその場で呼び出し、救い出すことであり、理性的自主意識を以てもう一種の抑圧気味の『史実』を築くのではない」(邱二〇一頁)⁽⁸⁾と邱氏は論を結んでいる。邱論文は、李昂が何故虚構性に溢れる「小説」の文体で事実

重視の「自伝」を書いたのか、という問いに対して、一つの有力な視点を提供したといえよう。しかし、邱氏は、謝雪紅が左派革命路線で植民地政府と直接的に衝突することにより闘争側の資本を浪費したことは、まさに謝の欲情そのものを彷彿とさせる、と論じた点については私は容易には同意できない。

なぜなら、本作における「寓話」が情欲の成長と啓蒙という伏線の物語を描く際にもたいへん重要な役割を果たしている点を、邱氏は見落としているからである。性欲と情欲における自主性は常にフェミニズムにおいて最大の課題であったと言えよう。李昂は「歴史」に記録されていない謝雪紅の情欲における自主性、情欲の自己完結性を描くことにより、すでに世に知られている政治的自立に対し、情欲面での自立も描きあげたのである。ここで、一つの問題が浮上してくる。情欲の自立なしに、社会的自立はあり得るのか。

一 「寓話」による謝雪紅および女性の性欲成長史

本作冒頭に登場する「寓話」とは、信義のために殉死した「七爺、八爺」が神像祭祀において幼児であった「私たち」を好き放題に怖がらせ、大人たちもこれを黙認していることである——德行により神となったがゆえに、無責任な態度で「私たち」を脅す行為が許される。これにより、世間的規範（家父長制）で規定された德行は大人たちと共犯関係を結んでいることを示唆し、後の「寓話」のすべてはこの関係を基調としているといえる。李昂は、謝雪紅をめぐる歴史的描写の中にこのような「寓話」を頻繁に挿入し、謝がその中の女傑や妖怪を彷彿とさせることを強く暗示している。その上で、「代々転生する内に」（藤井訳書二五〇頁、以下同様）「大昔から変わらぬ問題」（二二一頁）「千年来」（三〇三頁）などの言葉により、古代から現代にかけての不変の女性差別の事実を提起し、謝の生涯をして、李自身を含む女性全体を代表させているのである。

さて、これらの「寓話」は謝雪紅の如何なる側面を語るのか。それは謝の、革命家として歴史に記された一面に対す

る、情欲という私的な一面である。さらに、その「寓話」を謝の個人史年表に沿って再読してみると、知識獲得のほか、啓蒙から、成長、自己満足、諦観超越へと、謝雪紅の情欲の軌跡が読み取れよう。もちろん、「私」の多層性により、謝を指すはずの「私」は、常に曖昧な文脈に置かれるので、この「私」は作者の李とも読み得る。

洪心弧の童養媳時代の謝が語られる時、初夜には寝続けるようにと「私たち」は教え込まれてきた、という語り手の経験談が差し込まれた。そして、「わたし」は初夜の時、『蛇の若君』という「寓話」を思い出し、「わたしの小洞を出入りするのは蛇や否や、どうしてわたしにわかろうか」（三八頁）と思うように至った。この段階では、謝は家長制下にある女性親族の言いつけを守るばかりであった。極端に受動的で、自分の体に関与するものの正体さえ確認せぬ、情欲の前史的段階にいたのである。セックスをただの性行為と認識している時期であり、知識面においても前史期である。続く、張樹敏の妾時代、謝が神戸の隣人たちから「タヌキ」と呼ばれる時、語り手の「私」は三伯父の「狐の化け物」の「寓話」を回想し始める。そして、狐の化け物の「私たち」は男の愛撫により女性として自分の体実感を持つようになり、かつ初夜の出血が男に忘れられたので、男たちの間を遊び歩こうと決意した、というくだりが挿入される。この段階の謝は、自分の肉体を以て張から文字を習っており、彼女にとつてのセックスとは自分の性欲の充足よりも知識獲得の意味が強い。言い換えれば、情欲は啓蒙期に入るが、セックスはやはり情欲の充足のための存在ではなく、知識を得る手段なのである。

その次は林木順と共に社会主義を学ぶ時代、すなわち上海時代であり、そして林と駆け落ちした謝が、彼女の革命の啓蒙者林の紹介で中国共産党により「東方大学」に留学生として派遣されるモスクワ時代である。「C.P.主義」を信仰すると疑われた謝は、同校の日本人学生と恋愛関係になつていとさえ噂される。林木順とのセックスの場面は、謝が「男の身体に跨り」（二三三頁）、「こんな気持ちいい汗は久しぶり」（二三三頁）と言ひ、「汗は実のところ一種の記号であり、占領のメルクマークとして残されているのだ」（二三三頁）と描かれた。そして、この時、三伯父が語り手の「私」

に「魔神子」の「寓話」を語るのだ。人の気を吸って彼を死に致らせる『魔神子』には男はいらん、自分で楽しむ手だてがある」（二三七頁）といい、それは白樺の幹に体を摩り付けることであるというのだ。この段階は、謝が林と駆け落ちすることによって情欲面で自分の性欲に目覚め、自主権を取り戻し、さらに男体を道具として満足を得ることを実践する段階である。謝は知識面（特に革命に関する知識）では、自分の啓蒙者である林と共に『日本共産党台湾民族支部』を創設するまでに成長した。

そして楊克煌との『国際書店』時代では、「台共」の活動で逮捕され台湾に送還された謝が、台湾共産党の勢力拡大運動を担う一方、楊と恋愛関係を結んでいく個人史描写の中に、呪文を唱えて山を移し海をひっくり返す「樊梨花」の「寓話」が挿入される。この段階では、一転して謝は情欲面で男性の楊の指導者となり、知識面においても楊の教師役を担っている。

続く台湾総督府の弾圧による獄中時代には、謝雪紅の拷問と、自慰との描写の中に、「指で月を指すと、耳削ぎの罰が当たる」という「寓話」が描かれる。女性の自己による情欲の快楽である自慰という行為が世間規範（家父長制）からは容認されないことを暗示されているといえよう。また、月光による自慰の描写に、性器が月の満欠に従って徐々に陰茎になったり陰核になったりする女性「梵塔那尼」という三伯父の「寓話」が書き込まれる。ここでは「すべてがわたしたち自身により完結される、すべてがわたしたち自身本体に源を発するのなら、わたしたちにできないことなど何がある？」という問いかけがなされている。これについて、上野氏は同性愛者のイリガライが言うところの「女はひとりで完全だ」という言説の実践だと指摘した。⁽¹⁰⁾しかし筆者には、李が描いた「梵塔那尼」とは、やはり情欲を自主的に享受していく異性愛の女性の象徴と思われる。それゆえ、同性愛者の情欲享受と比べても新鮮なエクリチュールになっていると思われるのだ。異性愛者の女性でありながら、男性なくして性欲の自主的充足が可能というイメージは実に新鮮と言える。その意味では、イリガライよりも香港作家董啟章（一九六七）の「安卓珍尼」⁽¹¹⁾における、女性情欲の

自己完結性を意味する雌雄同体の蜥蜴に近いイメージだと思われる。従って、この段階の謝は、男女性交以外に、自己による情欲享受の快楽を発見し、体内のもう一人の自分に目覚めた段階に位置する。このために刑務所から出た謝が楊とセックスする時、謝楊兩人と楊の妻に加えてもう一つの謝の人格である「わたし」が現れるのであろう。

日本敗戦後、謝雪紅は国民党と共産党組織の間で活躍し、「二二八事件」では民衆の武装蜂起を指導し、国民党に指名手配される。その間の描写に、「虎おばさん」の「寓話」が挟まれている。逃亡中に謝は、強烈な性欲のため部下の周明を誘惑した。ここに「魔神子」の「寓話」が挿入されるのだが、謝が必要なのは女体としての性欲の充足と周の忠誠心だけであり、愛情ではなかった。

大陸に逃亡して中華人民共和国に協力し、台湾民主自治連盟主席となつて、謝が権力の頂点に立つという時期には、「褒姒、妲己、女皇帝」の「寓話」が織り込まれる。謝が肅清される時には「ロシア人形マトリョーシカ」という「寓話」を以て、彼女の内部には情欲と権力欲が層を成しており、「永遠に止めどなく、永遠に飽き足りることもなさそうなのだ」（二八三頁）と語られる。そのため、「なぜ究極の快楽においてさえ、層を成すわたしの中のある場所に、暗闇で潜み、冷たく静まりかえつて、時に眺めては冷笑する私がいるのだろうか。（わたしはあなたと同様、恐いのだ）」（二八三頁）、と感じるに至る。謝は、総督府の弾圧で投獄されていた時代から、男性支配下の女としての情欲感覚の他に、女性としての主体的な情欲の存在に微かに気づいていた。それが権力欲の充足によってさらに成長し、多層に発展したのである。ところが、現実の社会はこのような「欲張り」の女性を容認しないため、とうとう主体的情欲が無意識のレベルに止まったのであろう。

文化大革命中、晩年を迎えた謝雪紅のその不屈の態度が描かれる時、「千手千眼観音」の「寓話」が挿入される。ここでは、「わたしは千眼を以て巡視し、千手を以て欲求を掴み取ったが、今では同様に千眼千手を以て欲求を取り除くのだ」（三二二頁）と、謝が情欲と権力欲を同時に超越する最後の段階に入ったことが示唆される。

二・曖昧な「わたし」と多層的間テクスト

この一連の「寓話」による情欲の成長・推移変化は、歴史的描写の展開と平行しており、李昂はさらに「わたし」の多義性と「わたしたち」の曖昧性を用いて、作者自身と、語り手と、謝雪紅と、女性全体とを鎖のようにつなぎあわせていくのである。このため、本作で何度も使われる指示対象が曖昧な「わたしたち」（はっきり指示対象を判断できる場合は別として）とは、語り手李昂とその三伯父の男性中心主義的思想による「寓話」を聞かれた彼女の従姉妹たち、また李と同じようにこのような「寓話」で育てられた女性読者、そして時に謝雪紅から分裂した複数の謝を意味しているといえよう。場面によって一々「獄中の謝と投獄者を指す」⁽¹²⁾と解釈する。赤松氏の分析は、あまりに狭すぎるのではまいか。

李昂『自傳の小説』は非常に豊かなテクストである。それは「謝雪紅の個人史」を以て、「台湾史」と「台湾女性史」、さらには「女性史」一般とを一括して描いた。まさに、フレドリック・ジェイムスン (Jameson, Fredric) のナシヨンナル・アレゴリー (national allegory) という概念の実験といえよう。儒教の権化である三伯父は野史により謝雪紅への偏見を語り続けるが、同時に抹殺された「台湾史」の「事実」を示している。また、国民党にも見放され、中国共産党にも理解されなかった謝雪紅は、さらに「母国」日本と「祖国」中国の間で彷徨っていた。いわば、台湾人＝被植民者という烙印から始終逃れることができなかったことを物語っている。それは、また女性の運命に通じるものでもある。

一人の女性の一生を台湾人の国家アイデンティティの象徴とする発想は、一九二〇年代の作家にすでに見られる。たとえば、施文彬の「台娘悲史」⁽¹³⁾などがある。それは「日猛」が「台娘」を自分の妾にしたがり、彼女の父の「華大」を脅かし、ついその目的を遂げたという寓話体小説である。作中人物の「華大」「台娘」「日猛」をそれぞれ中国、台湾、日本と象徴している。⁽¹⁴⁾李昂はさらにその発想を意識的に戦略化したと言えよう。ゆえに、この小説が「台湾人のため

台湾」を模索する台湾」（藤井解説）と「台湾女性の集団記憶」（同）の高みにまで達したのだろう。

その重層的構造において、第二のテーマでもある連続する「寓話」とは謝雪紅の政治的個人史と情欲の成長変化との描写の間で、「間テクスト性」的な読みを可能としており、これにより『自傳の小説』は従来の「植民地台湾」と「女性」をテーマとしたテクストよりも一段奥深い作品となりえたのである。

三. 階層化される読者、「寓話」中の「寓話」

本書は重層的テクストであるだけでなく、読者もこのテクストによって階層化されると思われる。まずは李昂と同じく「狐の化け物」や「虎おぼさん」などの寓話を聞き慣れた台湾人女性は、文中の「わたしたち」と最も深く同一化し、知らず知らずのうちに自我形成に害毒を与える家長制に身震いすることであろう。次は上野氏や赤松氏のように、これらの台湾「寓話」を自分のアイデンティティ形成史の一部として李と共有することはできないものの、女性として強く「わたしたち」との同一化を感じる人。そして、男性読者たちは常に主人公との同一化から隔離され他者として位置付けられているため、「わたしたち」との同一化は難しく、必ずや違和感を抱き続けるに違いない。なぜなら、この「私たち」は「女たち」であるから。

本作ではこのほかに「寓話」の中に「寓話」、或いは歴史的描写の中に寓意のようなものが読み取れる。例えば、「なぜこれまで誰も、わたしたちが一体どのように人間の言葉を話すようになったのか、について語らなかったのか。」という一節、(三二三頁) 或いは男子のお許しを頂きに来た時、「わたしたちは修業不足である、わたしの人間の言葉はどこから来るのか？」(三二三頁) などのくだりは、女性が男性の作った「言葉」や社会規範を習い、男性の「お許し」を望むことを諷諭している、それは、三伯父の物語により、男性が自分に都合よくに女性の歴史を変造することを示唆する点に通じている。

男が「彼女に『デタラメ書き』にされるのを嫌がっている」（五八頁）が、ペニス（合法的家父長制暴力の象徴）「で字をおしえて」（五〇頁）やることを好むという一節、そして「わたしは人間にもなっていないのだから、どうして言葉が話せようか？」（三二四頁）という一句は、さらに、家父長制社会においては、反逆する「魔女Ⅱ鬼」にならない限り、真の自己表現は不可能であることをも訴えている。また、私には三伯父による物語に対し、語り手はあえて評価を控えていると思われる。おそらく、故意に三伯父に偏見に満ちた物語を語らせることにより読者により深い思考を迫っているのである。

終わりに

末筆ながら、私は「梵塔那尼」について始終疑問を抱いている。月の満ち欠けにより、性器が陰莖になったり陰核になったりするのなら、何故「梵塔那尼」は「女の一種」なのか。或いは、家父長制の抑圧下に生きている女性は男性化の欲望を抱くのであろうか。ペニス一本の差で父権社会と共謀関係を結べるほど事態は容易なのだろうか。その一方で、男性には女性になりたいという欲望はあるのだろうか。

そもそも『自傳の小説』は果たして「家父長制の終焉」（赤松五三頁）の物語といえようか。たとえ三伯父の死は「男尊女卑の伝統的礼教イデオロギー」との「和解」（藤井解説三四七頁）だとしても、家父長制は、三伯父の寓話を聞いた次世代の者に受け継がれているに違いない。晩年に三伯父を養っていた彼の二人の娘は、父の葬式について、三伯父の息子たちから何も尋ねられず、知らせさえ受けることはできなかった。台湾における家父長制の終焉とは、まだ遠い未来の話なのではあるまいか。

注

- (1) 「李昂の新しい冒険——〈女〉と〈女たち〉をめぐる物語」『東方』東方書店二〇〇五年、七月号。三二頁。
- (2) 「李昂『自伝の小説』——『周縁』台湾のフェミニズム小説」『創文』二〇〇〇年、七月。一三頁。
- (3) 陳芳明は「謝雪紅評伝——落土不凋的雨夜花」(台湾・前衛出版社、一九九一・七)で台湾共産党の創立者・謝雪紅が台湾解放のために献身した革命活動を台湾左翼運動史の流れで位置付けようとした。日本語訳版は「謝雪紅・野の花は枯れず——ある台湾人女性革命家の生涯」(陳芳明著、森幹夫訳、社会評論社、一九九八、六、三〇)である。
- (4) 「李昂『自傳の小説』における語り」『お茶の水女子大学中国文学会報』二三号、二〇〇四年、四月。五五頁。
- (5) 「テクスト相互関連性」とも訳される。ジュリア・クリステヴァがロシアの文芸家ミハイル・バフチンの思想を吸収し、創出したものである。彼女は「あらゆるテクストは引用のモザイクとして構築されている。テクストはすべて、もう一つの別なテクストを吸収、変形したものである」と定義した。(土田知則「間テクスト性の戦略」夏目書房二〇〇〇・五、二四頁。)
- (6) 「記憶失控錯置の擬相」：李昂『自傳の小説』中の記憶與求贖——中外文学二〇〇二・一。
- (7) この自主的記憶 (voluntary memory) と非自主的記憶 (involuntary memory) とは、邱がドイツの作家、文化史家、文芸評論家ヴァルター・ベンヤミン (Walter Benjamin) の理論を援用したものである。自主的記憶とは「它以合乎理性邏輯的『智性』為依、只會再度扼殺曾經被壓抑在意識之下的過去、以致完全忠於史實地重複主流的歷史記憶」。(二〇〇頁) 非自主的記憶の目的とは「非自主性記憶的目的在於救贖失落或錯失的機會、以及未曾相識、未敢承認、未能實現的願望。更重要的是、這些曾經被壓抑、但在日後得致救贖的過往、是斬新、彷彿從未發生過的過去、足以讓追憶者當下所感到的『喜樂』達到一種『從未聽聞、史無前例的高度。』」(二〇〇頁)である。
- (8) 原文「就是要把一直活在歷史空白中的謝雪紅運用非自主性記憶把她受到壓抑的女性心性在當下召喚、拯救出來、而不是用理性的自主意識建構出另一套帶有壓抑味道的『史實』」。
- (9) 語り手(ほば李と重なる)と女性全体の同一化は「私たち」の使用により成立する。この点については赤松美和子の先述論文がすでに論述した。「實際私たちは確かにもう貞節ではないのか」(一六七頁)と云う問題について、「私たちは、『謝』と語り手、作家、女性全体が渾然一体、或いは境界が曖昧である」と論じた。(同論文五九頁)
- (10) 同注1。三五頁。

- (11) 【安卓珍妮—Androgyny: 雌雄同體：一個不存在的物種的進化史】(台北，聯合文學一九九六)。
 (12) 同注4。五九頁。
- (13) 【台灣民報】第二卷第二号一九二四，二二，一一。
- (14) 葉石濤【台灣文學史綱】台灣·春暉出版社，二〇〇三，一〇，二〇、三四頁に參照。「以【華大】來暗示中國，以【台娘】來暗示臺灣，以【日猛】來暗示日本。日猛希望能夠討貌美的台娘為妾，使用各種毒計逼使她的父親【華大】就範，結果台娘就淪為日猛的妾了」。